

『小平の神社とお寺(中央図書館2階ギャラリー展示)』より

寛保四甲子年

泉蔵院引寺証文

二月日

引寺願証文之事

一当大沼田新田場ニ寺院無^レ之村中困窮仕候間、御門葉
泉蔵院当新田場え御出し被^レ下候ハ、村中不^レ残菩提
祈願共ニ泉蔵院旦那ニ罷成、向後之分地百姓者不^レ及^レ申
段々出百姓縦社人山伏之類出候共其儀定仕為^レ致^ニ証文^一
泉蔵院旦那ニ相附村内居住之分不^レ残子孫永々ニ至迄菩提
祈願之旦那ニ罷成村内え永々不^レ出^ニ余寺^一一村一ヶ寺ニ仕縦
何分之儀御座候共離旦那不^レ仕、随分泉蔵院え志を励遂^ニ
入魂^一寺院相続候様ニ可^レ仕候間何とぞ村中願之通当新田
場え泉蔵院引寺之儀
御奉行所え御願上可^レ被^レ下候、弥引寺被^ニ仰付^一候ハ、寺地者
奇附証文之通無^ニ相違^一相附寺造立之儀も新田場相
応二旦方共奇進造立可^レ仕候、且又当分住持之思召当も

無^ニ御座^一候由、其儀も寺出来仕候ハ、旦方共も随分心を付
相応之出家及^レ承候ハ、致^ニ相談^一移し候様ニ可^レ仕候、然上者
從^ニ東叡山^一被^ニ仰出^一候儀者不^レ及^レ申、御本寺より被^ニ仰聞^一候
儀、泉蔵院者不^レ及^レ申惣旦方共迄及^ニ違背^一申間敷事

一 泉蔵院旦那内ニ而幼少之子共致^ニ出家^一候儀者各別、晚年
之者無常道心発し候共於^ニ他宗^一剃髮仕間敷事

一 泉蔵院無住之節者宗門印形御本寺え代印願可^レ申事

一 泉蔵院無住ニ候ハ、惣旦方^々寺之番等仕寺内者不^レ及^レ申
寺分田畑山林竹木下草ニ至迄一切紛失不^レ仕候様可^レ仕候、
尚又御本寺え無沙汰ニ住持者勿論留守居成共隠入

置申間敷事

一 泉蔵院住持入院仕候ハ、早々御本寺え継目御礼

金百疋扇子三本入箱持参御礼可^レ申事

一年礼年々正月十一日を定日ニ仕、泉蔵院年玉鳥目

式百文二本入扇子箱、弟子共有^レ之候ハ、銘々壺人ニ付鳥目

百文宛持参御礼可^ニ申上^一事

一 毎年七月十日迄之内盆供白米式升鳥目式百文

可^ニ相納^一候事

一 毎年十一月廿四日天台会ニ式百文、泉蔵院弟子共有^レ之候ハ、

銘々百文宛持参法事出勤可^レ仕事

一 泉蔵院持高御本寺え無沙汰ニ売物或ハ質物坏ニ

入させ申間敷候、殊ニ竹木売払候儀從_ニ御本寺_一御下知を受可_レ申候、万一無_レ捌筋ニ而金銀他借仕候ハ、先達而相窺御吟味之上御裏判を以借用候様ニ仕、若一判之借用又ハ旦那内ニ而加判仕候共先達而不_レ預_ニ御吟味_一候借金一切寺附ニ仕間敷候、縦何分ニ滞候共申出間敷候事

一泉蔵院普請等惣而分外之造立一切仕間敷候、新ニ

造立之儀者不_レ及_レ申立替普請有_レ之候共先達而絵図を以

相窺御差図次第ニ可_レ仕候、将又入仏供養或者十夜七夜

等興行候ハ、開眼開_闢回向等急度御本寺御請仕、

尚又先住年忌追善是又御本寺え御願可_レ申事

一泉蔵院并弟子同宿ニ至迄灌頂相勤候ハ、深太寺村深大寺ニ而

可_ニ相勤_一候事

〔用語〕

いんじ

引寺…「ひきでら」とも。寺院を他の地域から引き移すこと。元禄期以降、幕

府は寺院を新しく建立することを禁止したため、武蔵野新田など享保

期以降に開発された多くの村で引寺が行われた。

もんよう

門葉…一般的に血縁関係がある一族。同族・身内。また一門の分かれ・流派。

社人…下級の神官。

山伏…山中で修行する修験道の道者。修験者とも。

ひぎ

足…鎌倉時代から江戸時代にかけて用いられた錢貨の数え方。鳥目十文を

いう。百足は千文（一貫分）、金一両を錢百足と称した。

ちようもく

鳥目：錢の異称。江戸時代までの錢貨は円形方孔のもので、鳥の目に似ているとしての名。

かんじよう

灌頂：仏教用語で、頭に水をかける儀式。また、密教では阿闍梨（あじゃり高僧）より法を受けるときの儀式。

「解説」

この文書は、寛保四（一七四四）年、泉蔵院が成立するにともない、大沼田新田の名主弥左衛門、開基檀那伝兵衛及び総代七名が今寺村報恩寺（現青梅市）との間で作成した証文です。①引寺の際、寺地などは檀家が寄進すること、村人は子々孫々まで離檀しないこと。②晚年者が「無常道心」を発しても他宗で剃髪しないこと。③無住により宗門印形できない場合は本寺が代印すること。また、④無住の場合に檀家が寺の番を行うこと。⑤住職が入院する場合は本寺への継目礼金を出すこと。⑥正月十一日を年礼とし、泉蔵院へ年玉をお礼としてすること。⑦七月十日まで盆供として白米を納めること。⑧毎年十一月廿四日の天台会には二百文出すこと。⑨本寺の断りなく泉蔵院持高を売却することなどは禁止する。また、借金は寺附けにしない。⑩分に過ぎる普請はしない。新たに普請を行う際は事前に指図を伺うこと。十夜七夜等の興行などは本寺の意向を受けること。⑪灌頂は深大寺で勤めること。以下、全18項目にわたって条件・禁止事項などが詳細に記されています。

次に文字を見ていきましょう。まず表紙の「藏（蔵）」



「證（証）」



共に異体字です。特に「證」は頻出します。くずすと



このようになります。

「當(当)」
「當」は今までにも登場しましたが覚えていますか。「留」
「南」

「留」にも似ています。また、この文書で頻出の「寺」
「寺」は、「鳥」
「守」

「高」にも近似しています。漢字の上部や冠の形が若干異なります
ので、文脈と併せて見極めましょう。(実践講座第九回にも解説があります。)

「魂」の字は、本来左右にある部位が上下にあり特徴的です。古文書では

このように、部首が替わっている漢字が見られることがあります。(「忝(松)」

「寄(崎)」
「畧(略)」など。そして今回は「應(応)」
「發(発)」

「賣(売)」
「會(会)」
「拂(払)」
と、異体字がたくさん登場

しました。異体字を覚えることは古文書学習の近道ですから、しっかり覚えま
しょう。

間違えやすい漢字

「高」	「守」	「寺」	「留」
			
「亭」	「專」	「鳥」	「馬」
			

